

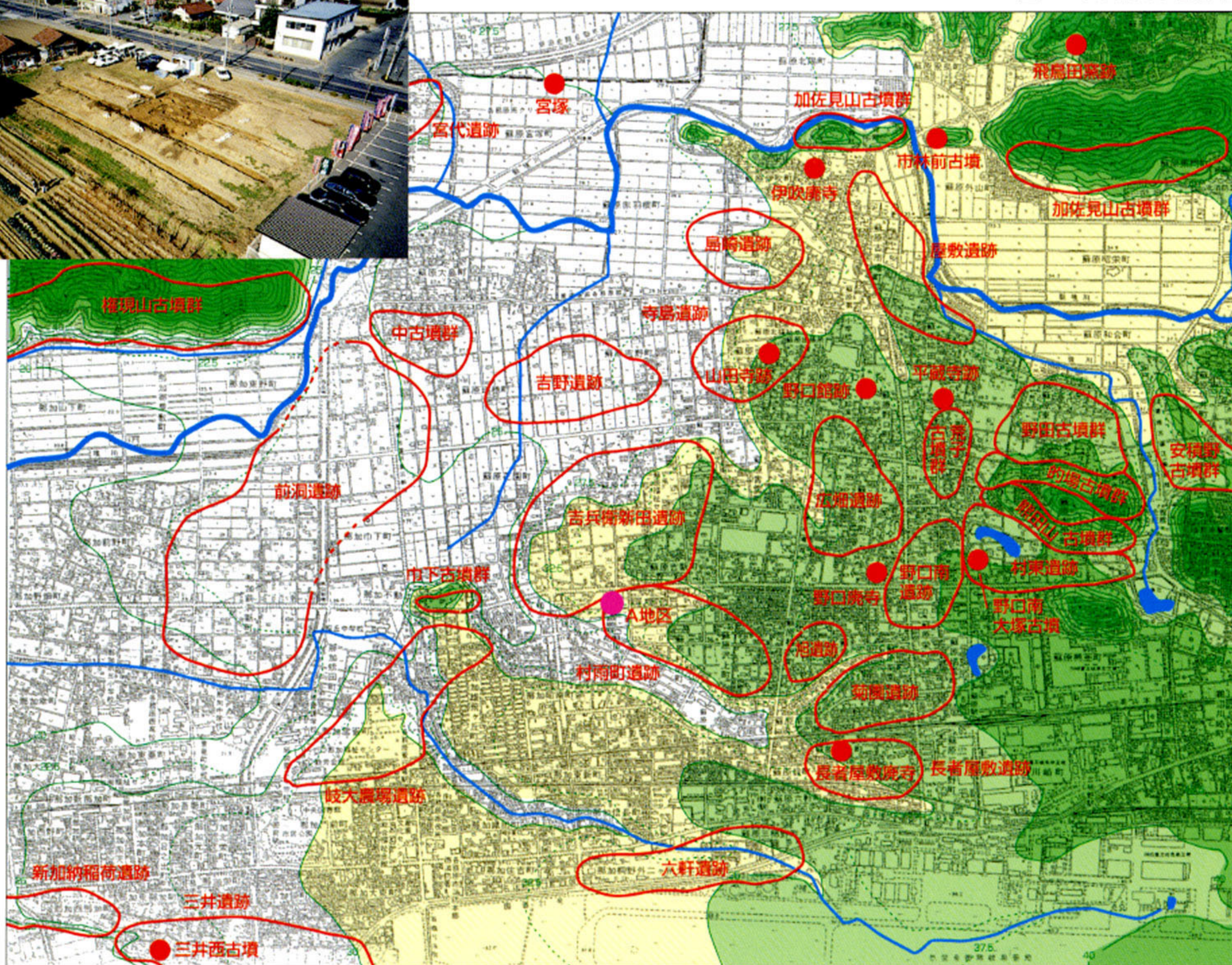
村雨町遺跡 A地区

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583)83-1123
平成11年3月31日



写真1. 村雨町遺跡A地区周辺（南東上空より）

図1. 1/30,000地形図



明治24年測図および平成2年度岐阜県遺跡地図を参考

村雨町遺跡は蘇原希望町・村雨町などに広がる遺跡です。蘇原地域は大小の侵蝕谷がつくられ、各務原台地が半島状に突出している所がたくさんあります(図1参照)。村雨町遺跡はそのような谷に沿った、台地や緩やかな斜面に暮らしていた人々の生活の跡です。

周辺を見ても、谷や川沿いの緩斜面に生活の跡が残されています。たとえば縄文時代を中心とした六軒遺跡や、古墳・奈良時代を中心とした集落地と考えられる菊園遺跡や長者

屋敷遺跡、縄文時代から中世まで長く人々が住みついた広畑遺跡など、生活にとっても適した土地であった事がうかがえます。また、古代寺院が集中しているのもこの辺りですので、蘇原地域は古代各務原の一大中心地であったに違いありません。

そのような中で村雨町遺跡でも、昭和40年に「美濃」と施印された土器が見つかるなど、奈良時代には一集落が形成されていたのではないかと考えられます。

A地区の調査

平成7年度、蘇原希望町のいちよう通り沿いの畑にガソリンスタンドが建設されることになり、遺跡の試し掘りを行なったところ古代の住居跡が1軒見つかりました。そこで、記録保存のための発掘調査をすることになりました。

村雨町遺跡は、北西から南東に向かって台地に深く入り込んだ谷の北側の台地斜面に、ほぼ東西に長く広がっています。今回発掘調査を行なったA地区はこの村雨町遺跡の西の端にあたります（平成9年度に終了した遺跡詳細分布調査では吉兵衛新田遺跡に含まれています）。すぐ南には、先述した谷につながる小さな谷が入り込んでいるため、A地区のある高台から南は2～3m低い谷への傾斜地となっています。また、「美濃」刻印須恵器が発見されたのは、この小さな谷を挟んで南東の高台であったと思われます。

A地区では住居跡が2軒と数十基の穴が見つかりました（図2参照）。

1号住居跡は床が4m×7m程度の広さで、周囲には細い溝（壁溝）が巡っており、床は所々硬くなっていました。また、床には大きな

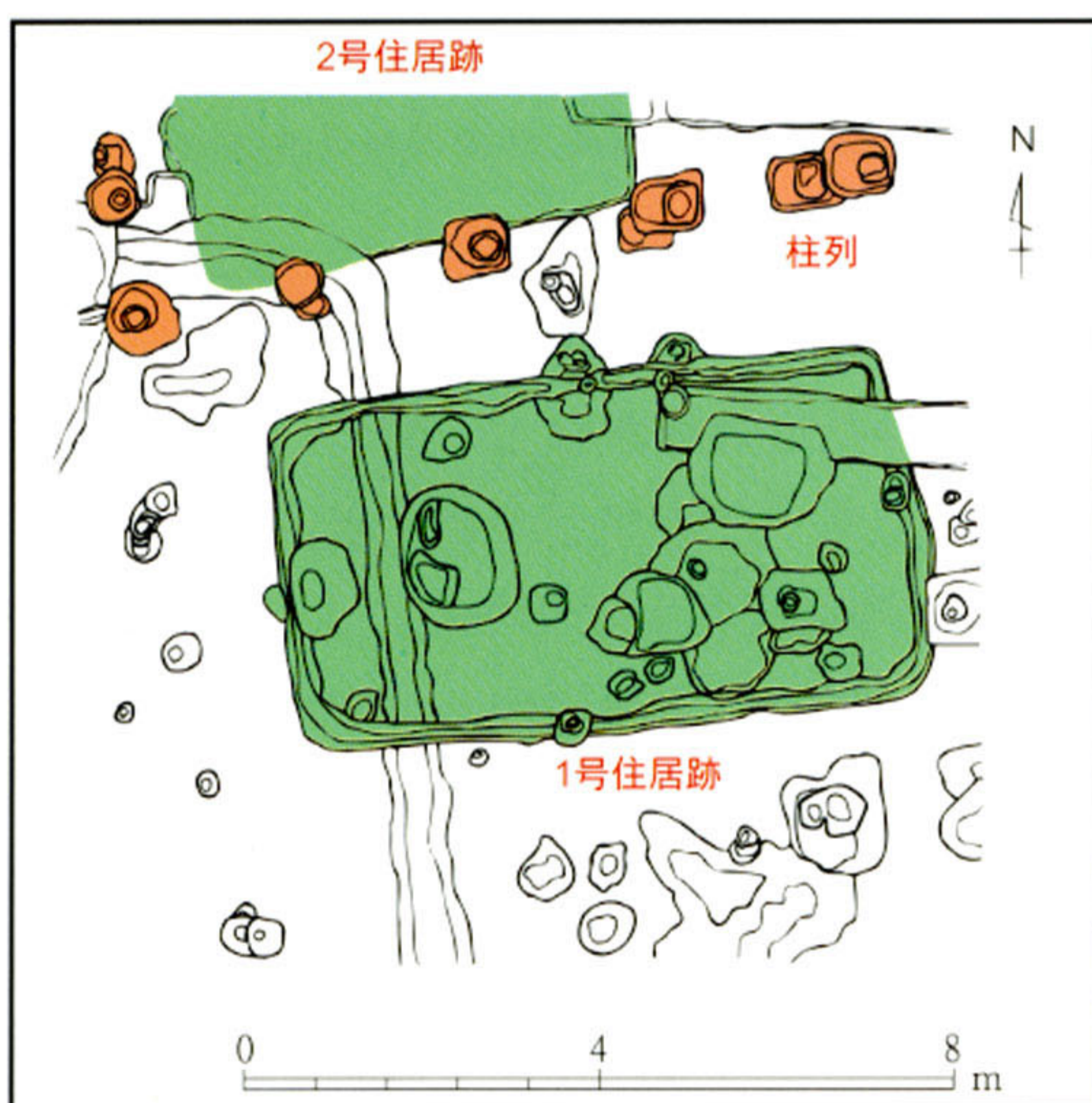


図2. 遺構分布図



写真2. 1号住居跡



写真3. 2号住居跡と柱列

穴（土坑）がいくつも掘られていて、中には焼けた土（焼土）が埋まっているものもありました。さらに、この住居跡ではカマドが2基見つかりました。その北には80cm×60cm程度の柱の跡（柱穴）が東から西へ五基並んでいました（柱列）。さらに西端の柱穴の北にも1基あることから、ここで折れ曲がって北に続く可能性もあります。またそれぞれの柱穴には同じ規模の柱穴が重複していることから、建替えが行なわれた可能性が考えられます。この柱列の北には一辺5m程度の住居跡と思われる堀込み（2号住居跡）も見つかりました。

その他、1号住居跡の西および住居跡に重なって、直径40cm前後の円形の柱穴が十数基、何に使われたのかよく判らない土坑もいくつか見つかりました。

1号住居跡

今回の調査区は過去の工事等により遺構の上半部以上を削平されており、残りは良くありませんでした。そのため詳しいことは判りませんでした。少なくとも普通に生活していた住居ではないと考えられます。その理由は、住居跡の硬くなった床面に焼土粒や炭粒が多く含まれていることと、焼土の詰まった土塚が3基見つかったことです(写真4,5)。特に、類似する土塚が住居跡の外には見つからなかったことは、この土塚が住居に伴うものであることを物語っています。また、住居跡には燃えた柱などは無かったことから、火事に遭ったわけでもないようです。以上の事から、この住居跡は火を伴う何らかの作業場であったと考えられます。



写真4. 土塚 No.7

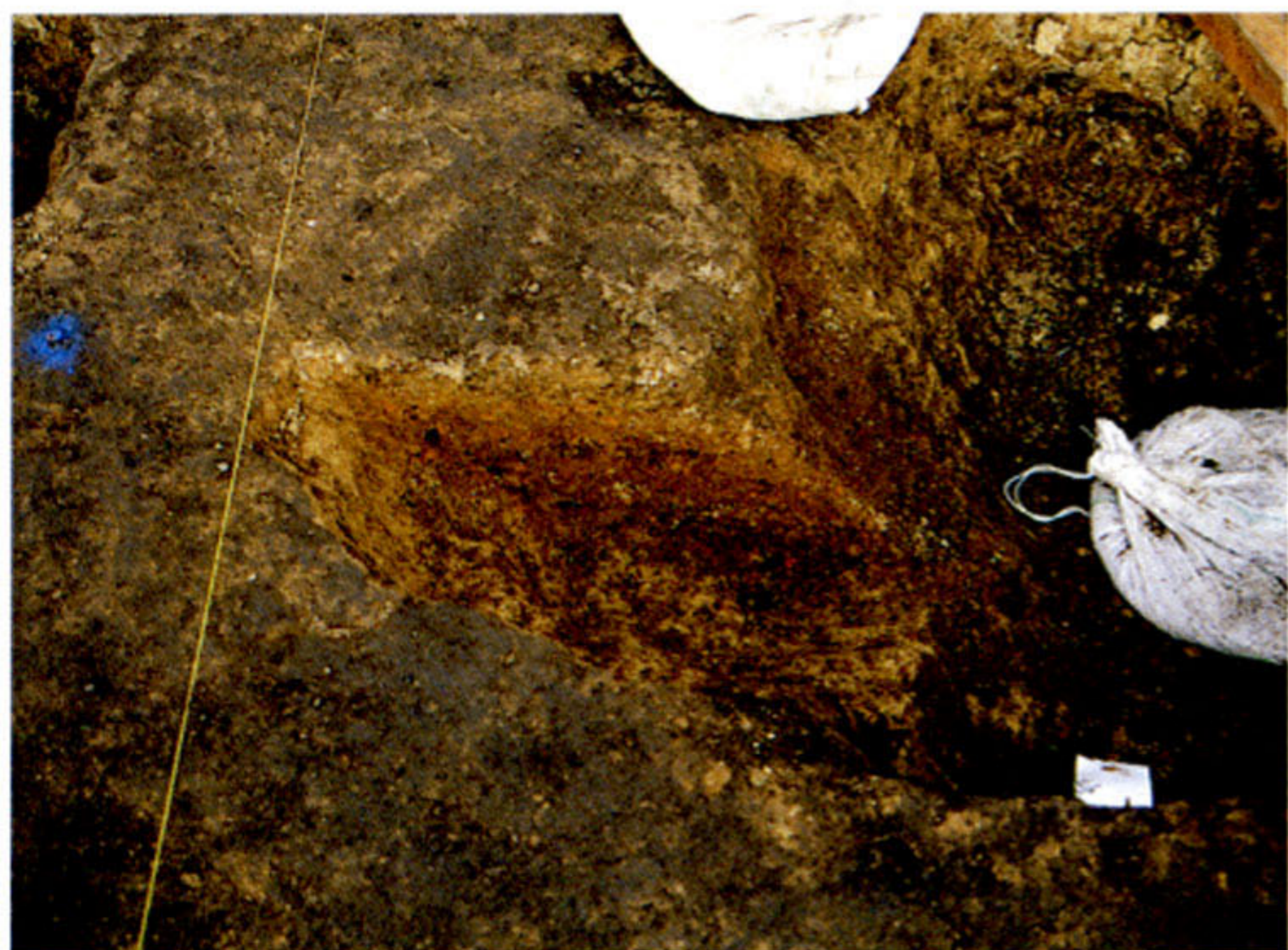


写真5. 土塚 No.5



写真6. 鉄製品およびスラグ

さらに、南辺の壁溝からは鉄を精製する際に出るカナクズ(鉄滓:スラグ)が1点見つかり、西辺の壁溝付近からは床面直上で鋤先と思われる鉄製品の破片(写真6)や、半円形の鉄製品の破片などが見つかりました。これらのことから想像を豊かにすれば、この住居は小規模な鍛冶の機能を有していた事も考えられます。この住居を含む一集落、あるいはその周辺の人々は、普段使っている鉄製の道具が壊れたりした時には、ここに修理に出していたのかもしれませんが。

この住居跡の特徴として、カマドが2基見つかった事もあげられます(写真7)。ただ、この2基のカマドが同時に使われていたのか、それとも片方が廃棄されてからもう一方が新たに作られたのかは判りませんでした。

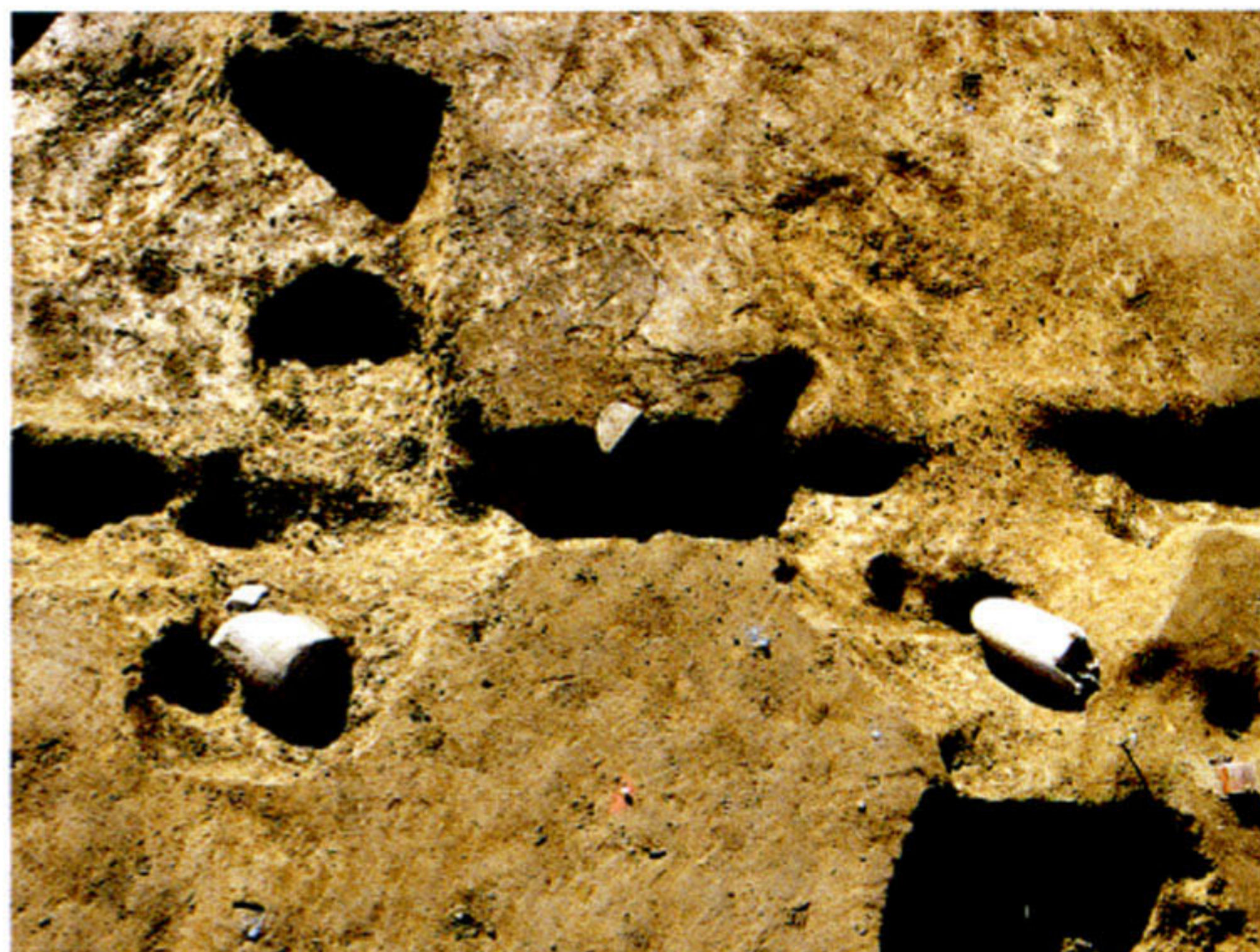


写真7. カマド

墨書土器

発掘調査をしていると、昔の人が使用した土製の器(土器)が沢山見つかります。そのような土器の内面や外面に、まれに「厨」「寺」などのような文字や「◎」「∴」などのような記号、人の顔などが墨で記されているものが見つかります。そのような土器を「墨書土器」と呼んでいます。1995年に三重県嬉野町片部遺跡で見つかった「田」の可能性のある墨書土器は、新聞にも大きく取りあげられて有名になりました。4世紀の土器ということで、日本においていつから文字が使用されたのかという問題に深く関わって注目されましたが、これまで見つかっている墨書土器は7世紀～10世紀のものが多いそうです。

各務原市でも、昭和54年度に調査を行なった三井遺跡から「荒人」「東」などと記された墨書土器が見つかっています。最近では平成3年度に前洞遺跡から「大」「本」、野口廃寺から「寺」と記された8世紀代の土器が見つかるなど、すでに奈良時代には文字を理解出来る人が住んでいたと考えられます。

そのような中で村雨町遺跡A地区でも、1号住居跡内土壇から「麻呂(麿)」、その北側の柱列から「種」と記された土器が見つかりました。「種」は少しくずした字体ですが、どちらもしっかりとした筆運びで書かれています。



写真8. 墨書「麻呂」あるいは「麿」



写真9. 墨書「種」

ることから、この墨書を記した人は文字を理解していたことがうかがえます。特に「麻呂(麿)」は線は細いですが非常に整っています。この土器は古代の食器の一種であったと思われます。もしかしたら、几帳面な性格の人が他人の器と区別するために、自分の名前を書いていたのかもしれませんが。もう一方の「種」は「麻呂(麿)」とは筆跡が違うことから同一人物の手によるものではないと考えられますが、どういう意味があるのかは判りません。

まとめ

今回調査を行なったA地区は約280㎡です。蘇原地区の台地突出部全体から見れば僅かな広さですが、作業場的な住居跡や墨書土器など貴重な資料が記録できた調査でした。もちろんこのA地区だけで当時の様子が判るということはありません。しかし、古代寺院の集中がこの蘇原地区に見られることから、古代この地が政治・文化の中心地であったことが想像できます。その台地の周縁部における今回のような住居跡の発見は、集落あるいは都市形成の一つの形態を表しているのではないのでしょうか。これからさらに周囲を調査する機会が得られれば、もっといろいろな事が判ってくることでしょう。